

圏外のアンテナ

[福島競馬場]の巻

わたしの通った中学校が福島競馬場の隣だったという話をすると、目を輝かせる人が、必ずいる。

世の中に、競馬ファンは予想以上に多いのである。

加藤茶の母校としても知られる福島二中。この学校に、中学2年の春、転校して来たわたしは、学校の備品の潤沢さに目がくらんだ。

音楽室の棚には、輝く管楽器が並んでいたし、野球部は、初めて見る金色のバットで素振りをしていた。

これらの品々は、競馬場から学校へ贈られた、お詫びの印だという噂だった。

実際、風向きによって、体育館には厩舎から流れ込む、特有の香りが浮遊。レースの翌朝の校庭には、ハズレ馬券が花吹雪。通学路には、どこかの誰かの置き土産の酒瓶が鎮座…。

そんなカオスな思い出話を、競馬ファンはなぜか、面白がって聞くのだった。

このような絶好の環境で育ったのに、ギャンブラーにならなかったのは、もったいない。お経を読めない門前の小僧なのである。

先週、高校のプチ同級会があって、ほぼ20年ぶりに福島市を訪れた。

2時間ほど時間があつたので、駅前のレンタサイクルで、懐かしい中学へ！

気がつくと、学校裏の小道にいた。ここに、二中生だけが知る、バラ線が微妙に裂けた、場内へ通じる秘密の入り口があつたはず…。

自転車を降り、ウロウロしたが、新しい堅固な塀がそびえ立つばかり。

仕方なく、石壁の細い継ぎ目を見つけて、顔を押しつける。と、ピカピカ光る緑の芝の海が見えた。

瞬時、涼しい風が頬をなでた。あの14才の風が。

=2013年8月6日掲載=



コントロールタワーのある左下が福島競馬場。上の緑は、福島二中の樹木である